

なお、五〇年に前回の白書で、市内に県下接収地の半数の一四か所があるとふれたが、その後五二年に横浜ペーカリー、五三年に横浜チャペルセンターの二か所が解除された。終戦以来の接収面積一、六〇八haのうち、五三年六月現在で解除面積一、〇〇四ha、未解除面積六〇四haで、そのうち上瀬谷通信施設が二三七haを占めている。

高度成長とともに

●スプロールはじまる

昭和二十年代には、東京区部内への転入は、きつく制限されていた。米の配給のめどがたなかつたからだが、このためあらたに東京に職を得た人々は、住居を二三区のおとに求めざるをえなかつた。こうしてまずスプロールはお米が原因ではじまったのである。

東横線の沿線を例にとると、二十年代の後半には、多摩川を渡った川崎市武蔵小杉や元住吉など東京に近いところから農地が宅地にかわった。もともと軍需工場の多かった関係で、個人住宅よりも社宅が多くつくられている。そ

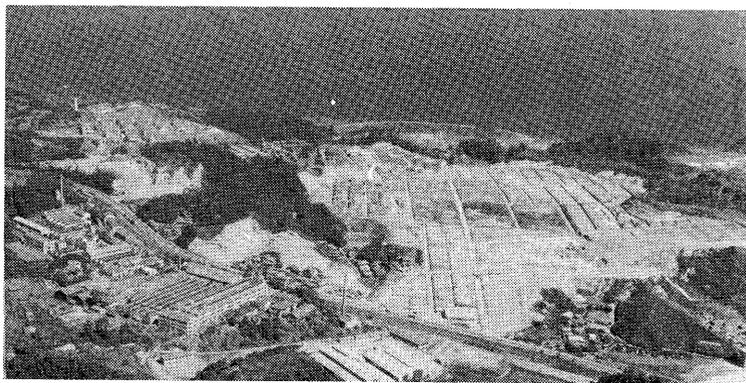
こがうまると、だんだんと南下し、横浜市域へひろがってきた。

低地では綱島と大倉山のあいだが、四、五年のうちにきれめなくつながった。それから日吉・師岡・菊名・篠原の丘陵地が切りくずされて住宅地になった。この年代の住宅地の条件は、駅へ歩いて通える範囲ということだった。駅でバスと連絡しているのは綱島だけで、鶴見や大柵とむすんでいたが、本数もすくなかつた。また二十年代の後半、東急は将来田園都市線の沿線になる山林を自分で買うか、地主に整理組合をつくらせるプロジェクトをすすめていた。まだまだ私鉄の駅のすぐ近くに（相鉄三ツ境など）家賃のやすい公営住宅がどんどんつくれた時代だった。

日本住宅公団の発足は昭和三〇年七月だが、翌年五月に千葉の稲毛団地ができあがり、入居がはじまった。ピカピカのステンレス流しやガス台、水洗式のトイレ、ガス風呂などは、当時の新生活のシンボルだった。

民間では、これよりさき三〇年の一二月に第一生命住宅が武蔵小杉の駅前にできている。第一期工事は一二戸ずつの九棟で、うち八棟は会社用に社宅として分譲され、一棟だけが一般用だった。2DKの五〇㎡で一戸平均一八〇万

スプロール前の金沢区谷津坂



円だったから、
 さきにあげた横
 浜市内の土地五
 〇坪つきの住宅
 一四一万円より
 割高だったが、
 鉄筋であったし、
 内部設備が当時
 の最先端をゆく
 ものだったので、
 実にモダンにみ
 えた。

とここで横浜
 市民の住居をみ
 ると、昭和三〇
 年には、持家の
 数が借家の約二
 倍あったが（持
 家一四万四、八
 一二戸、借家七
 万一、五五五戸）、まだ戦災バラック建ての不良住宅がのこ
 っており、それに当時の住宅金融公庫の貸付は、建坪が一
 五坪に制限されていたから、小住宅が圧倒的に多く、住居
 についての状況は、戦前よりはるかにわるかった。市営住
 宅は三一年までに五、三〇七戸がつくられているが、人口
 の伸びに追いつかず、つねに数十倍という応募があった。
 そこへいくと、公団住宅の家賃は2DKで五千円前後と、
 公営の倍に近かったたので、三十年代前半には競争率も一〇
 倍以下と低かった。それゆえ、所得の点で資格があれば、
 サラリーマンだったら二、三年の間に入居できる時代だっ
 た。六畳の間借り三千円の世間相場からすれば、2DK五
 千円は割安だが、三〇歳のサラリーマン平均月給二万円の
 当時には、二五％の住居費というのはずいぶんきつい感じ
 がしたものだ。

●人口が爆発的にふえる

昭和二六年にふたたび百万の人口を突破した横浜市は、
 その後三四年までの八年間、毎年二〜三％ずつ人口が増加
 していった。それが三五年以降は四〜五％とピッチが倍に
 なり、四〇年には六・七％となった。横浜市では、この六

年間に一三七万人から一七八万人へと三〇%増えているが、同じ期間の東京都区部の増は七%、北九州市をふくめた七大都市平均では九・一%だから、いかに横浜市の人口増がはげしかったかがわかる。

これは三五年以降の高度成長のもたらしたものだ。東京都の区部からあふれ出た人々は京浜および三多摩・京葉地区などの近郊都市へ移り住んだが、それは商業化や工業化をもたらさず、ベッドタウンとしての衛星都市が首都圏のまわりに群生することになった。

また東横線の沿線を例にとると、横浜市域では綱島や日吉の後背部（高田・吉田・新羽町など）へスプロールがひろがった。通勤には駅までバスを利用する時代の到来である。そして、田園都市線と根岸線が開通した四十年代は、ますます横浜の人口が増加し、四三年には二〇〇万人、九四年には二五〇万人を突破した。昭和四一年の緑区青葉台の住民の前住地は、東京都内五三・六%、県内一九%、市内一・九%、区内六・七%となっている。いかに東京からの転入が多かったかがうかがえる。

ところでその頃、横浜市では、緑区の「多摩田園都市」開発にともなう一〇年間の財政需要を試算してみた。結果

は支出二四四億円にたいし、市民からの税収入は七一億円しかない。しかも、この支出には学校・保健所・清掃工場・下水処理場・道路舗装費・河川改修費は入っているが、図書館・保育所などの施設費はみていないのである。

しかも開発は田園都市だけでない。三九年をさかいとして大手の宅造業者による大規模開発が市内の各所ですすめられていた。横浜市行財政のうけ入れ能力をはるかにこえた宅地開発をそのまま放置しておけば、横浜の都市づくりは破産してしまふ。では横浜市は、このような状況にどう対処したか。

●都市づくりの根幹

宅地開発にさいし、開発面積の五%を公益用地として、一 m^2 あたり三千元で、横浜市が開発業者から買いあげるという内容の「横浜市宅地開発要綱」がつくられたのは昭和四三年九月だが、実はこれ以前に、東急の「多摩田園都市」で学校用地を無償ないしは原価で提供する覚書をと리카わしている。この覚書をもとに他の会社にも同様の協力をもとめたのがこの要綱であるといえる。生活の知恵から生み出されたこの方策を実施したのは、十大都市では川崎市に次

いで横浜が二番目だった。昭和四四年から五三年度に建築された小中学校一五八校のうち、約半分の七四校がこの要綱による公益用地を使用している。

つぎに、昭和四五年のいわゆる線引きにさいしては、国の基準によれば市街化区域になってしまふところを、横浜市では、調整区域をできるだけひろくとるために、市独自のきびしい基準をもうけ、この結果、全市域の二五%を市街化調整区域とした。

ところで、横浜市内の民有山林面積は、昭和三年には約一万一、〇〇〇haあったものが、現在は五、七四〇haと半減している。市内の山林は、緑地としてさまざまな機能があるほか、市民の散策やいこいの場として利用されている。調整区域にくみいれられた森林は保全されるが、市街化区域内の山林はいずれは開発されるものである。緑をまもるためには買取りがのぞましいが、財政がこれをゆるさない。そこで市では、四六年、緑政局の誕生を機に、市街地の緑地をのこすために山林所有者へよびかけて、緑地保存地区、市民の森を設置した。このほか都市にあつては畑も緑地の一環である。これについては農業専用地区、農業緑地を設定した。

こうした努力によつても、山林は二〇年間で半減し、農地は四〇年の七、九三八haが五〇年には四、二八三haと減っているが、大都市のなかでは緑の環境は、東京・大阪よりはるかにめぐまれており、この比較的良好な環境を、今後どうやって維持していくかが市政の大きな課題となっている。

●横浜のイメージ・チェンジ

昭和三十年代の横浜は、映画や歌などとりあげられると、波止場を中心に密輸とか麻薬とか、もっぱら暗い面スポットライトがあてられ、こわい街という印象がつよかった。黒沢明監督の映画『天国と地獄』（三八年）はとくに舞台を横浜と決めているわけではないが、ロケを横浜の山手と下町で行つており、山手に住む会社社長Ⅱ天国、下町の犯罪者Ⅱ地獄と対比して、横浜のもつ二面をあざやかに画面に登場させていた。

こうした横浜のマイナス・イメージがプラスに転化したのは、どうやら「ブルーライト・ヨコハマ」の歌が転機になったようだ。昭和四三年のことだからちようど一〇年ほど前になる。おなじ港町でも、神戸の方が六甲山という背

景によって町の景観は立体的であるが、神戸港には臨海公園がない。そこへいくと、横浜はせまい一画ではあるが、山下公園から山手にかけての一带がエキジチックな味わいをもっており、それが歌だけでなく、若い女性向けの雑誌などに取りあげられることによって、横浜のイメージはプラスにかわつたのである。

実をいうと、この頃になると、港の見える丘公園から見下されるのは港では倉庫のむれであり、港内に停泊するのほとんどは貨物船でしめられ、かつての豪華客船で代表されるはなやかな港町のふんいきはとうになくなつてしまつたのだが……。

戦前の横浜は、旅客船の発着によって、日本の表玄関だったが、戦後、船から航空機への転換により、羽田空港に玄関の位置をゆづつた。輸送革新によるコンテナ船時代の到来は、東京大井埠頭を優位にたたせ、横浜港の比重は低下した。また戦災と長期間の接収により、エッソなどの石油会社や数多くの問屋が東京へ移転し、横浜正金銀行は閉鎖され、その後身東京銀行は本店を東京へ移した。こうして、いまの横浜は、東京の本店経済の影響下にある支店経済という色彩をこくしている。にもかかわらず、横浜駅西

口地下街の単位面積あたり売上げや、郊外にある銀行支店の営業成績はきわめてよい。この対照的ですがたは、現在の横浜が、東京のベッド・タウンとして住宅都市としての色彩がこくなりつつあることによって説明がつく。

昭和三十年代、流行歌でさかんに取りあげられた東京の銀座や新宿の地名が、四十年代になると歌の世界からさがたを消し、かわつて横浜が舞台に出てきたという。たしかに「東京砂漠」にくらべれば、まだ「よこはまたそがれ」のように、横浜の方が東京の中心地より人間の住む街という印象をあたえるのであろう。歌によりこまれる地名がしだいに津軽海峡とか青葉城とか北のほうへ移っているのも、そこにまだ人間のいぶきが強く残っているという思いからなのであろう。